アジアの虫

第６号

2002 年 10 月 31 日発行

題字：宋　貴美子

編集・発行　　アジア児童文学日本センター（[redacted]）

２００４年大会　名古屋市・富山県大島町で開催

第６回アジア児童文学大会（大連市）で決定

去る８月２１日から中国の大連市で開かれた第６回アジア児童文学大会において、次の第７回大会を日本で開催すること、その開催地を名古屋市および富山県大島町とすることなどが決定されました。これで２年後の２００４年、アジア児童文学大会が日本で開催されることが正式に決まったことになります。

閉会式での畑中副会長の挨拶　左は和歌山静子氏

閉会式には、当センターの畑中圭一副会長と画家の和歌山静子氏が登壇。まず畑中副会長が、第７回大会の開催時期を２００４年８月４日から８月９日までとすること、大会テーマとして、「アジアの子どもの本その未来形をさぐる～共生の時代に生きるこどもたちに」ということを考えていることなどを説明し、アジアの各国・各地域から数多くの方々が参加されるよう呼びかけるとともに、歓迎の意を表しました。つづいて和歌山静子氏からは、第７回大会を絵本に焦点化したものにして、アジア各国・各地域の絵本の交流を深める機会にしたいという抱負が述べられました。

今回の大会は趙郁秀氏を中心とする遼寧省児童文学学会の熱心な取り組みによって予定通り終了しましたが、台湾代表団の不参加という問題をはじめ、翻訳・通訳の不備、発表者や発表時間の削減等々さまざまな問題を残しました。来る２００４年の大会はそうした問題・課題を克服して、より充実したものにしていきたいものです。（第６回大会については、次の２～３頁でくわしくお知らせしています。）

第２回大会実行委員会準備会　１１月２６日に

前号でお知らせしましたように、第７回アジア児童文学大会実行委員会のための準備会が去る６月１４日に開かれ、大会開催時期や大会テーマについて了承を得ました。大会開催の正式決定に基づき、より具体的な話し合いを進めるために、第２回の準備会を１１月２６日（火）に開く予定です。今回の準備会では、大会プログラムや予算案、後援団体や協賛団体等協力機関の問題などが話し合われる予定です。

なお大会プログラムについては、当センター会員のご意見をお聞きしながら、また大島町をはじめ関係団体・機関と話し合いながら、理事会などでの検討を経て、最終的には実行委員会で決定されることになります。会員の皆さんからも積極的なご意見をいただきたいので、よろしくお願いします。

第6回アジア児童文学大会　１３国・地域から２０８名が参加

第６回アジア児童文学大会は、予定通り８月２１日から２５日まで中華人民共和国遼寧省大連市で開催されました。会場は美しい星海公園に隣接する星海広場の中の大連展示センター。その２階の国際会議場が主会場でした。折りしも、この展示センターでは国際モーター・ショウが盛大に開かれており、大勢の人がつめかけておりました。まさに中国経済の力強さを目の当たりにする情景でした。

今回の大会は遼寧省児童文学学会と大連市文学芸術連合会が主催し、これを宋慶齢基金会と中国作家協会がバックアップするかたちで開かれました。また中国最大の電器メーカーＨａｉｅｒがスポンサーになっていたようです。

開会式で　子どもたちの詩の朗読

大会テーマ「平和・発展と新世紀の文学」の下に、次のような６つのサブテーマがあり、これらに基づく論文発表が行なわれました。

① 平和・発展と児童文学精神の向かうところ
② 環境保全、エコロジー文化と児童文学
③ インターネット文化、ＴＶ、映画、アニメーション等マルチメディアと児童文学
④ 文学の傾向（ポストモダン、フェミニズム、暴力、性表現等）と児童文学
⑤ 幼年文学、絵本と児童文学
⑥ 現代児童の生存状況と児童文学

論文発表者は、韓国１０名、中国７名、日本６名など計２９名で、２日間にわたり発表が行なわれました。

大会参加者は１３国・地域から２０８名。日本からの参加は３９名でした。そのうち次の６名が論文を発表しました。

(1) しかた・しん「アジア的児童文学とは？～時間イメージをめぐる試論」
(2) 鳥越信「日本の創作絵本～現状と課題」
(3) 白百合女子大グループ「日本児童文学史研究プロジェクトについて」
(4) 畑中圭一「エコロジーと児童文学～宮澤賢治に見る『共生』の思想」
(5) 李慶子「平和・発展と児童文学の向かうところ」
(6) 中尾明「『ハリーポッター現象』について」

これらの発表のうち特に注目されたのは、《アジア的時間》について論じたしかた・しん氏の論文でした。すなわち、直線的非可逆的に流れる欧米の時間に対してアジア的な時間は「円環となって巡る時間」であり、自然と一体化した時間であるというのがしかた氏の主張ですが、さらに氏は、こうしたアジア的時間に基づいて「エピソードが優先する物語的時間」が生れるのだということを「西遊記」を例に提示しました。

また鳥越信氏は、日本における最近の創作絵本の不振を指摘、熱い討議が必要であることを強調しました。

白百合女子大の若い研究者６名による発表も注目を集めました。今取り組んでいる児童文学の研究史プロジェクトについて宮崎麻子、内藤貴子、佐々

見学した私立幼稚園で　園児たちのダンス

木由美子、工藤智子、沼賀美奈子、池田美鈴の６氏からそれぞれの担当領域についての報告が行なわれました。

畑中圭一氏の発表は、宮澤賢治の「狼森と笊森、盗人森」など４作品をとりあげ、それらに人間と自然との共生というメッセージがこめられていること、またその背後に仏教的世界観や東洋思想があることを指摘しました。しかし、生態系維持のための食物連鎖を必要視するエコロジーの立場からは、弱肉強食の殺し合いを認めなかった賢治の思想や生き方には限界があることを提示、エコロジーと東洋思想の統合という新たな課題を提起しました。

作家の李慶子氏は自作『はなぐつ』に描いた在日コリアンの子どもたちがかかえている《負の遺産》について述べ、また『庭を出ためんどり』の翻訳出版に際して起きた主人公名の和名化問題をとりあげて、民族差別の根深さを指摘、話題性に振り回されている児童文学界の現状を厳しく批判しました。

最後に中尾明氏は、日本における「ハリーポッター現象」をくわしく紹介し、読者の心をひきつける作品を生み出すことと、メディア・ミックス戦略の必要性を強調しました。

外国の発表論文では、中国の曹文軒氏及び同じく朱自強氏のものに注目が集まりました。曹文軒氏の論文「『成長小説』について」は、「成長小説」という、われわれにはなじみのない用語を使用していますが、要するに従来の児童文学の枠組みを拡大した本格的な文学の創造をめざそうとする主張です。曹氏によれば、これまでの「児童文学」は非常に限定性の強い概念で、幼年から小学校高学年までの子どもの文学とされてきました。したがって中学生以上、成人以下の、いわゆる思春期、あるいは青年期の生活領域を表現することが難しい。特に「児童文学は浄土だ」とする考え方が大きな障害となっている。成長小説が確立されるためには、この浄土論を克服しなければならないというのが曹氏の結論でした。曹氏のこれまでの創作活動、並びに主張の総括とも言える論文として、興味深いものでした。

もうひとりの朱自強氏の論文「児童文学と児童生態学」は、「子ども期」の問題を取り上げたものでした。「子ども期」は歴史上発見された概念であって、「学校」とつよく結びついています。つまり、さまざまな社会的圧力から子ども期を守ってきたのが、学校ですが、今の学校は受験準備の場となり、子どもたちはそこに学ぶ喜びを見出せなくなっています。メディア環境が子ども期を消滅させていると言われるが、それ以上に受験体制が子ども期を奪っている今、デューイの言った「教育は生活だ」という言葉を思い起こすべきだというのが朱氏の結論でした。

宋慶齢基金会事務局長を囲む各国・地域の代表

大会３日目には見学ツアーが行なわれました。見学箇所は私立幼稚園、和平公園、旅順口、２０３高地などでした。高級住宅街の一角に設けられた私立の幼稚園は、施設・設備、教員体制、教育内容など現在の日本の状況とほぼ同じレベルのものでした。園児たちはダンスと楽器演奏で歓迎してくれましたが、ダンスの曲が「パッパ　パラリラ　ピーヒャラ　ピーヒャラ……」という、例の「踊るポンポコリン」だったので、日本人一同思わず笑ってしまったという次第です。和平公園では、世界のさまざまな有名人が数多く描かれた、平和共存を訴える巨大な壁画を鑑賞。また心ある人たちは、平和のための一言メッセージを書き記すプロジェクトに協力しました。

５日間の大会は予定通り終了しましたが、先にも指摘したように、その運営にはいろんな問題がありました。また大会の中心的部分である論文発表は全体としてかなり低調であったように思われます。研究大会としての真摯な取り組みと、参加者相互の交流促進が今後の大会につよく望まれます。

日本からの参加者は３９名。女性が２７名、男性は１２名でした。第１回大会から６回連続の「皆勤」が５名、今回初参加という人は十数名でしたが、相互の交流はとても深まりました。７０代が８名と高齢者も多く、また半数近い人が下痢などで体調をくずしましたが、全員無事帰国しました。この大会で得た知識や交友関係を今後のそれぞれの活動に生かしていただきたいものです。

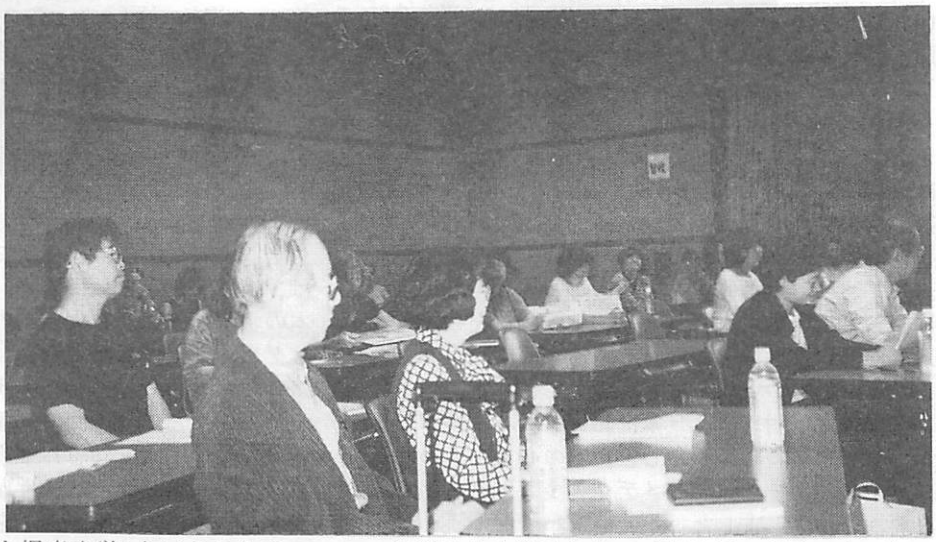
アジア子どもの本のつどい　大阪国際児童文学館で　盛況裡に終了

中国、韓国をはじめアジア各国・各地域の子どもの本にもっと熱いまなざしを向けていただきたいという願いをこめて、去る１０月６日午後、「アジア子どもの本のつどい」が当センターと(財)大阪国際児童文学館の共催で開かれました。会場の国際児童文学館には６０名を越える方々が参加され、終始熱心に講演を聞いておられました。

つどいは「アジア児童文学大会２００４について～大連から名古屋へ」という、しかた・しん会長の講演から始まりました。大連市での第６回アジア児童文学大会の概況と、２００４年に名古屋市と富山県大島町で開催される第７回大会の展望・抱負が述べられました。

中由美子氏の講演

次に大阪教育大学講師の成實朋子さんから「いま中国の子どもの本がおもしろい」と題して講演がおこなわれました。まず郁秀や韓寒など、高校生の時にデビューしてたちまちベストセラー作家になったいわゆる「高校生作家」について触れ、そうした若い人たちの創作活動を支えているとも言える作家・評論家の曹文軒についてその作品や思想の紹介がありました。つづいていま中国の児童文学で大きな潮流となりつつあるファンタジー（幻想文学）について触れ、彭懿、殷健霊をはじめとするファンタジー作家の現況が述べられました。最後に「メディアと児童文学」ということで、中国のアニメーションの現況についての具体的な解説がありました。詳細な資料に基づく、興味深い講演でした。



休憩をはさんで、次に仲村修さんの「韓国児童文学あれこれ」という講演が始まりました。最初に最近の日韓関連の行事を列挙され、少しずつではあるが韓国の児童文学・児童文化に対する関心が高まってきていることを指摘されました。韓国における児童文学の現状としては、「韓国文人協会児童文学分科」と「オリニ文学協議会」という二つの作家集団の対立が今も続いているということ、児童図書出版界は好況で、特に絵本の隆盛がめだつこと、少年小説では若手女性作家の活躍がめざましいことなどを挙げられました。なお児童文学研究については、その歴史的研究の領域に課題がたくさん残されていることを指摘されました。

最後に中由美子さんの「曹文軒の『サンサン』について」という講演。作者曹文軒から中さん宛の手紙などを紹介しながら、この作品を生み出した曹氏の原風景や、祖母との関係などについての解説があり、さらにこの作品の構成の新鮮さなど、作品をもう一度読んでみたくなるような指摘もありました。「日本語で読める曹文軒作品」という資料も提示され、曹文軒の世界への適切な道案内をしていただきました。

映画「草の家」１２月２１日から公開

曹文軒の『サンサン』（てらいんく刊）を映画化した「草の家」が、東京の岩波ホールで１２月２１日から公開されます。中国金鶏賞最優秀作品賞ほか数多くの受賞に輝く、評判の映画です。

◇◇◇風のたより◇◇◇

ソウルの大竹聖美さん、ソウルを訪れた李慶子さん、神戸市立中央図書館の谷岡史絵さんからの便りです。

鳥取で韓国の絵本原画展

海を越えて～韓国の児童文学・絵本原画展

「第２回生涯学習フェスティバルとっとり
まなびピア鳥取　２００２ｉｎ東部」

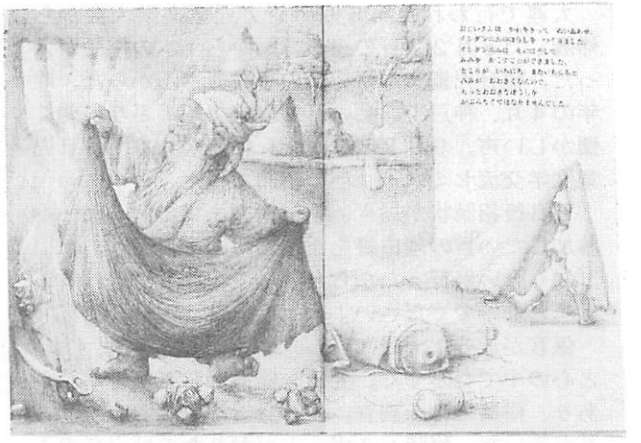
大竹聖美

２００２年７月２０日（土）から８月６日（火）まで、鳥取県立図書館で韓国の絵本原画展と韓国の絵本や児童書の展示会がありました。タイトルは「海を越えて～韓国の児童文学・絵本原画展」。期間中ソウルから『イングンニムのみみ』（ソ・ジョンオ文、ハン・ジヒ絵、大竹聖美訳　2001年12月古今社刊）の画家ハン・ジヒさんを招いた講演会も同図書館と米子市児童文化センターの２ヶ所で行なわれ、絵本の読み聞かせ活動をしている方を中心に、韓国の絵本は初めてという方々がハンさんのお話を聞きにいらっしゃいました。

講演会はまず、図書館司書の方による日本語版『イングンニムのみみ』の読み聞かせからはじまりました。つづいてハンさんがいつも自分の子どもたちにしているような感じで韓国語で語り、その後同書を翻訳した大竹が随時通訳をしながら講演が進行していきました。

この会の大きな特徴は、参加者の方々がけっして韓国に対して特別な関心のある方々ばかりではなかったということです。たとえば原画展でのアンケートでは「『イングンニムのみみ』は、民話と親子の姿という二つの物語があわさっていて、変わっているなとおもいました」「韓国の絵本（ハンさんの）は、子どもの表情がとても豊かで、家族がたくさんいたり、お父さんが描かれていて、子育てに参加しているという感じがしました」というように、＜親子関係＞や＜育児＞、＜日常生活の中に生きている民話＞といった児童文化の普遍的な部分についてより多くの関心が感じられました。

『イングンニムのみみ』は、日本でもよく知られている「王様の耳はロバの耳」の韓国版ですが、この世界的な説話といえる物語を現代の絵本にするにあたって、ハンさんは、自身が幼い頃にお祖母さんから昔話を聞いて育った経験から、＜昔話が日常生活に生きている＞ことを描きたかったと語りました。それで同書では、最初と最後のページに洗濯や赤ちゃんの世話で忙しい韓国の母親と、それでもまとわりつく子どもの姿が描かれています。子どもたちはお話をききながら家族のつながりを感じ、日常生活の中での葛藤を解消し生きていく力を得ているのです。



絵本『イングンニムのみみ』から

「物語の語り聞かせというと、ちゃんと子どもの前に坐ってあげて、なにか改まって聞かせてあげなくてはいけないのかと思っていましたが、実際の生活の中では忙しくてそこまでしてあげられません。ハンさんの絵本をみて、何もかしこまってすることもないのだなと自身が湧いてきました。」「素朴だった昔の生活が思い出され、韓国も日本も同じなのだと思いました。」ハンさんのお話に、お母さん方は共感して発言されました。そのほか日本の育児や家族の問題として幼児虐待も話題に出され、韓国の育児状況に対する質問もありました。

家族の絆の中で子を産み育てるという、人類普遍の営みとそこに同時に存在する児童文化は、異文化を超えて共感できるということを改めて強く感じられた講演会でした。そして、現在の日本の閉塞状況と、そこから抜け出していく力はどこから得られるのかということを、お隣の韓国に触れながら少し気づきはじめた、そういう印象でした。

アジアの児童文化に出会おうとした私の欲求も、決して理念的なものからではなく、現在の日本では得ることのできない、人間の原初的な力動感を求めてのことだったということを、集まられた方々の共感で高揚した表情を見て改めて確認できました。

鳥取県ではその後、ハングル学習熱が高まり、絵本を原書で読みたいとの問合せが相次いだそうです。またこの図書館では環日本海交流室を常設しており、韓国・中国・ロシアの原書をそろえ、この３ケ国語に通じる専門員が各国の図書館と提携し、交流を続けています。それらをふくめて、このようなアジアの地域との交流・共生は、これからの日本社会ではますます必要とされていくだろうということを実感したひと時でした。

（ソウル在住・誠信女子大学専任講師）

ソウルに吹く風　李　慶子

大連で行われた第６回アジア児童文学大会から帰阪した８月２７日の夜、韓国から１本の電話が入った。韓日児童文学研究会の李在馥さんからだ。昨年の４月、神戸でお会いして以来１年半ぶりに聞く懐かしい声。９月２８日（土）に開かれる「韓日児童文学交流セミナー」への招請だった。

３日後招請状が届き、朝鮮籍のままでセミナーへ参加したい旨の理由書を添付し韓国領事館へ。

「知り合いが行ったからといって、簡単に行けるとは思わないでくださいよ」

係官が放った一言に(そんなことわかってますよ)と心の中でつぶやく。翌日、領事から直々の電話があり、信条・身上調査。４０分近く電話でのやりとりが続いた。臨時パスポートがおりたのは出発の１週間前。「あちらで新聞沙汰になるようなことは決してしないでください」と念をおされた。それはどういう意味だ？と言いたいのをぐっとこらえた。韓国に行く前から神経はかなりすり減ってしまった。

９月２６日（木）ソウルは快晴。

父や母が生まれた国。空から大地をながめながら、植民地朝鮮から日本に渡り、二度とこの地を踏むことなく亡くなった父の無念を思って、胸が熱くなる。

ひとあし先に空港に着いていた上笙一郎先生が出迎えてくれた。一緒にいるはずの仲村修さんの姿が見えない。仁川空港はとにかく広い。上先生にしても私にしても何しろ初めての韓国なのだ。公衆電話から事前に聞いていた携帯に電話しようと持っていた小銭の１００ウオンでかけたがかからない。これはピンチだ、と思っていたら清掃のおじさんがテレホンカードを貸してくれた。いきなりの親切に嬉しくなった。やがて現れた仲村さんと研究会の代表を務める李在馥さんと再会を果たしたとき、韓国に来たことを実感した。

韓日児童文学研究会は出来てまだ日が浅い。日本児童文学に関心を持つ１１名の翻訳者や研究者がメンバーだ。会の紹介には１９９９年秋最初の勉強会を持った、と記されている。そして今日まで毎週金曜日の午後２時３０分から２時間、巌谷小波、小川未明、浜田広介、宮沢賢治、坪田譲治、新美南吉といった日本の近代児童文学作家たちの作品、さらに研究書や評論集を読みながら勉強会を重ねてきた。

小さな研究会が創作と批評社（出版社）の後援を受けて、今回のセミナー開催にこぎつけた。１年におよぶ準備の末にだ。

会場の大韓出版文化会館で今回一緒に招請され、私たちより１日遅く韓国入りした卞記子さんと顔を合わせた。会場には大連で一緒だった童話作家の張さんの姿も。私が韓国に来ると伝え聞いて、会いに来てくださったのだ。

セミナーの通訳は、韓国の誠信女子大学校で日語日文学科の専任講師をしている大竹さん。

上先生の講演「日本児童文学の思想＝性格」に対する二人の指定討論者の用意周到な質問には目を見張った。その一人、コウ・ヒャンオクさんは上笙一郎著「未明童話の本質」「児童文学概論」「児童文学の散歩道」古田足日著「さらば未明」などを読み進める過程で生じた疑問点、１９６０年に日本でおこった童心主義批判について言及し、今、韓国の児童文学は１９７０年代の日本のように「量の時代」に入っていると述べた上で、そのような時代に生きる韓国児童文学界の作家や出版人への助言を請うた。

もう一人の討論者朴淑慶さんは、韓国と日本の児童文学を鏡の両面とみなし、ゆえに、「韓国児童文学を世界史的な視野で客観的に見るためには、日本児童文学との比較考察が必須だと考えます」と語ったが、その言葉から韓日児童文学に取り組むメンバーたちの熱い思いを感じることができた。

午後２時から始まったセミナー。途中１５分の休憩を挟んで６時まで行われたが席を立つ人は誰もいない。６０人近い参加者の中には、遠く４時間もかけて釜山や大田からやってきた人たちもいた。

２７日夜の研究会メンバーとの懇親会、セミナー終了後の韓国居酒屋での交流会では文学のみならず、在日の置かれた状況などにも話がおよんだ。異国にいる私たちと彼らとの間には、あらゆる点で微妙な温度差があるのだ。それが少しずつ縮まっていく。

セミナーの前日ソウル市内を観光したが、至る所で４００数年前、豊臣秀吉が残した侵略の爪痕に遭遇した。さらに驚いたのは日本の侵略に抗う政治犯たちが収容された西大門刑務所。ここは歴史館になっており、当時の様子が再現されている。さすがの私もあまりの悲惨さにそれらを凝視することが出来なかった。

５年前北の地を訪れているので、分断された南北の地を両方踏んだことになる。ソウルの風もピョンヤンの風もやさしい。けれども南の地を自由に行き来するのは私にとってまだ容易ではない。暗く長いトンネルに差し込んだわずかな灯り。今はただそれに期待するしかない。(作家、『はなぐつ』の著者)

左端はｷﾑﾕﾝﾖﾝさん　右から二人目は李在馥さん

神戸市立中央図書館の児童書展示

韓国・朝鮮に出会おう！

（平成14年5月17日～7月19日）

谷　岡　史　絵

神戸市には、明治開港以来多くの外国人が住んでいます。平成13年度の統計では、神戸市に在住する外国人は 43,357 人で、総人口の 約2.9%を占めています。その中で国籍別にみて最も多いのが、韓国・朝鮮出身の方です。25,380 人、外国人総数の 58.5%にあたる方がお住まいです。

このような土地柄のなか、在日朝鮮人の経済人であり学者であった故・韓晳曦（ハン・ソッキ）さんが、私財によって蒐集された朝鮮史の図書コレクションを青丘（せいきゅう）文庫と名付けられ、市内で公開されておりました。1996年、そのコレクションを当館にご寄贈いただき、翌1997年6月には、神戸市立中央図書館の青丘文庫として再オープンしております。また、特に周辺地域に多くのアジアの人々が住む、長田区の新長田図書館では、「アジアコーナー」を設け、地域の図書館として好評を得ております。主に韓国・朝鮮と東南アジアに関する図書約1,400点（内ハングル図書約760点）を常時開架しています。

韓国・朝鮮の資料に深く関わってきた当館ですが、児童書に関しても、意欲的に蒐集してきた資料をうまく紹介できないかと常々考えておりました。今春、サッカーワールドカップの開催等で、韓国・朝鮮への関心が高まり、これを機会に韓国・朝鮮の絵本やおはなしにも関心を持ってもらおうと考え、開催の運びとなりました。

今回は、韓国・朝鮮の昔話絵本やおはなしを一同に集めたということで、普段あまり読まれることが少ない本も、手にとっていただくことができました。特に絵本は、表紙の絵から韓国・朝鮮の雰囲気がよく伝わるのか、人気がありました。また、子どもだけでなく、大人の方が展示台の前で足をとめている姿がよく見られました。本の借り出しは大変多く、約90タイトルの児童書を用意しましたが、会期中頃には大半が借り出され、紹介すれば面白い本は読んでもらえるのだということを、改めて実感しました。

今秋は、神戸市立新長田図書館において資料展示「アジアが舞台の物語」（会期：10月25日～11月10日）、神戸市立北図書館において資料展示「もっと知りたい！アジア」（同：10月26日～11月10日）を開催します。こちらにもぜひ、足をお運びください。（神戸市立中央図書館司書）

《問合せ先：電話番号》

神戸市立中央図書館（青丘文庫）	078-371-3351
神戸市立新長田図書館	078-691-1600
神戸市立北図書館	078-592-7573

新刊紹介

身の回りのものでつくる

Toys and Tales　おもちゃとお話

スダルシャン・カンナ／ギタ・ウオルフ／
アヌンシュカ・ラヴィシャンカール共著
翻訳・刊行　ＩＰＡなごやグループ

インドのＳ．カンナ教授を中心に編まれ、タラ出版社から１９９９年に刊行された“Toys and Tales”の翻訳である。茶色の再生紙に印刷された本文と、硬いボール紙の表紙をスパイラル綴じした製本。このシンプルさが「手づくりおもちゃ」の本にはふさわしい。

本書のねらいは、生活の中のありふれた素材を使っておもちゃを作り、それを通して遊びの本質をとりもどそうというものである。子どもの遊びとは、頭も心も体も進んで動かして楽しむこと、つまり主体的・創造的な活動である。ところが、ゆたかなモノに囲まれて育つ現代の子どもたちの生活は、そうした遊びの本質を失ってしまっている。それをなんとかとりもどそうというのが教授たちの願いである。

本書の構成はなかなかユニークである。ここには「音を出すおもちゃ」「踊るおもちゃ」など５種類のおもちゃ遊びが計２５収められているのだが、それぞれに３つのレベルの記述がある。①は「１２歳以下」の子ども向けにおもちゃの材料・作り方・遊び方が説明され、②は「１３～１６歳」向けに、そのおもちゃの原理（物理学的法則など）を説明し、遊びのアレンジや応用にも触れている。③は大人向けの文章で、遊びの本質論や、おもちゃに関わっての現代社会批判が述べられている、例えばこんな言葉が。「私たちは、おもちゃというものは中にあらゆるものを包み込んだ“種”だと思います。科学、工業技術、材料、デザイン、遊び、いろいろな関係、いろいろな文化などを包み込んだ種なのです。」

子どもから大人まで「楽しめる・考える」本として、一読を薦めたい。

頒　価：２０００円（＋送料実費）
注文先：名古屋市熱田区伝馬町２－４－７
相地　満氏までFaxまたは e-mail で。
本の到着後、該当金額を振込んで下さい。
Fax.０５２－６７１－４５９８
e-mail:souchi@skyblue.ocn.ne.jp

（畑中圭一）

紀要・同人誌紹介

中国児童文学　第１３号

2002.8.21. 中国児童文学研究会発行

特集“陳伯吹の世界”

「陳伯吹先生の作品と人柄」秦文君（中由美子訳）

「ひきしおさんと　みちしおさん」

陳伯吹（寺前君子訳）

「乳牛と少年」　陳伯吹（関登美子訳）

陳伯吹略年譜　ほか

「９０年代の中国児童文学」　朱自強

「中国児童文学の新しい風

—現代中国・ファンタジー事情」　彭　懿

「中国の児童ＳＦ小説作家

楊鵬氏へのインタビュー」　千頭仁美

「建国前夜の中国少年雑誌について」　成實朋子

「日本における中国児童文学の

翻訳受容について」　季　潁

「張天翼の『大林小林』

—作品成功の要因」　霜鳥かおり

「玉清批判の底流にあるもの」　笠原　肇

「すれちがい」　玉清（成實朋子訳）

ほか

★**連絡先**：大阪市城東区今福東２丁目 10-18-409

寺前君子　Tel. ０６－６９３２－７５８１

児童文学研究　第３５号

2002.10.15. 日本児童文学学会発行

《関連論文のみ》

「朝鮮総督府・朝鮮教育会『普通学校児童文庫』

—植民地朝鮮と日本児童文学」　大竹聖美

「発禁処分の行方—石森延男編『満洲文庫』と

東亜『新満洲文庫』」　河野孝之

「中国語圏児童文学研究文献解題—1994～99」

河野孝之

★**連絡先**：犬山市字内久保 61-1　名古屋経済大学

短期大学部川勝研究室気付　日本児童文学学会

Tel.& Fax. ０５６８－６８－３１７３

ま　ゆ　第８６号　2002.7.9. 童房舎発行

《関連作品・評論のみ》

「北海道児童文学私史」　小笠原洽嘉

［中国文学研究者笠原肇氏の自伝的文学史］

ま　ゆ　第８７号　2002.10.4. 童房舎発行

《関連作品・評論のみ》

「北海道児童文学私史（２）」　小笠原洽嘉

★**連絡先**：室蘭市八丁平 4-25-25 童房舎

Tel. ０１４３－４６－０７５７

おおしま絵本文化　第８号

2002.8.23. 大島町絵本館発行

《関連論考のみ》

「２００２年・夏」　吉田　力

「物語によって見えてくるもの

—アジアの物語世界を見直す」しかた・しん

「アジア諸国との交流に向けて」　髙井　進

★**連絡先**：富山県射水郡大島町鳥取５０　大島町

絵本館　Tel. ０７６６－５２－６７８０

小さい旗　１１６号

2002.10.　小さい旗の会発行

《関連作品・記事のみ》

＜中国の児童文学＞　落葉の秋

于立極作　水上平吉訳

中国に翻訳されたみずかみかずよの詩［らいおん］

詩集を日中交流のかけ橋に

★**連絡先**：北九州市八幡東区尾倉３－７－１０

水上方　小さい旗の会

Tel.& Fax.　０９３－６６１－４４８８

編集後記

１０月６日の「アジア子どもの本のつどい」は、参加者が６０名を越えるという盛況でした。東京から、きど・のりこさん、和歌山静子さん、河野孝之さんも駆けつけてくださって、本当に嬉しいことでした。当日の講演で仲村修さんが指摘されたように、今年は日韓関連行事が目立つようになり、アジアの児童文学・児童文化に対する関心が少しずつではありますが、高まりつつあることをうかがわせます。2004 年の大会によって、というよりも大会への準備期間を通して、こうした一般の方々のアジアへの関心、アジアの子どもの本への関心が高まるように努力を重ねていくべきだと思っています。

第６号も会員の皆さんや、関係の方々のご協力で、盛りたくさんの内容になりました。「小さいけれど、読み応えがある」とほめてくださった方もおられます。皆さんのご協力で一層内容を充実させていきたいと思いますので、どんなに小さなニュースでも、少々古い情報でも結構ですので、送ってください。

児童文学・児童文化の世界に新しい「アジアの風」が吹き通うことをめざして、私はパソコンに向かい続けます。　（畑中圭一）